未開発地域における食意識の構造

内野澄子

I　食意識と近代化

食に対する態度，意識は社会的条件と経済的条件によって決定される．地域社会の保守性や封鎖性の度合，都市化やマス・コミの浸透度，家族制度といった社会的条件が食意識の構造を強く規定する．また，生活水準や経済的生産の地域性といった経済的条件が食意識に及ぼす影響も否定しがたい．

さらに，人口学的変化の影響を見逃してはならない．特に，近年において著しい核家族化の傾向や強い家族計画意識にもとづく小家族化が食生活に対して及ぼす影響も忘れてはならない．

生活体系の中で，経済的欲求のみが独走し，健康や福祉に対する合理的な欲求が抑制されることは生活構造の奇型化を意味する[1]．このような経済的物的側面に対する生活の合理的，意識的側面の“おくれ”は，“食”の分野において典型的に反映する傾向が強い，その意味において，食意識指標は，日本人口の近代化の実体的な総合的指標でもある．“食”に対する意識の近代化は，日本人口の経済や社会の“再近代化”[2]の重要な推進要因となりうるであろう．

ここでは特に未開発地域とよばれる低所得水準地域における食意識の地域格差，社会階層格差を追求しようとしたものである．同じく低開発地域といっても地域による格差があり，また同じ地域において社会階層によって格差の存在することがあきらかにされ，食意識構造の複雑性を示唆している．

地域としては東北，四国，南九州の3地域の農村が対象となっており，社会階層としては出かせぎの有無，農家・非農家，病休者の有無等による区分を行った．また，世帯主の年齢階層区分による集計をも行った[3]．

ここで食意識というのは，調査の質問に使用された4項目——(1)栄養のこと，(2)みんなの好むもの，(3)あまり手間のかからないもの，(4)なるべく安いもの——を基礎としている．(1)は栄養を重点的に考慮するものであって，合理主義の指標として考えられ，(2)は家族員の嗜好を中心にしたものであり，(3)および(4)は経済的観点に重点をおくものである．

II　出かせぎと食意識

出かせぎ者をもっているあるいは出かせぎの経験者をもっている世帯の，調査対象世帯に占める割

1)　5月27日発表された昭和41年度国民生活白書は，最近におけるこのような生活構造の不均衡のはげしさをあきらかにしている．

2)　舘　稔，人口一億(7)，朝日新聞，昭42.7.15参照．

3)　調査対象地域における食を中心とする生活構造の一端については次の文献参照．
内野澄子，低開発農村における人口変動と生活構造，人口問題研究，98号，昭41.4.11.
内野澄子，人口学的特性と生活行動からみた東北・西南の比較分析，人口問題研究所年報，11号，昭41.11.5.
内野澄子，流出農村における食行動東北・四国・南九州の比較，昭42.
内野澄子，農村の食生活と栄養指導，臨床栄養．Vol. 31，No. 2—昭42.7.15.
内野澄子，農村生活の近代化と生活行動，農村生活研究，Vol. 11，No. 1，昭42.5.

合は東北では11.7%，四国6.8%，南九州5.8%であって，東北では四国，南九州の約2倍の高い水準を示している．このように東北と四国・南九州の間にみられる出かせぎの格差は一般にみとめられているところである[4]．もっとも，このような東北の高水準出かせぎ率は戦前からの伝統的な移動性であり，東北の経済的，社会的構造に深く根ざしているものと考えられる．東北と対照的なのは，同じく低開発地域と通称される四国，南九州の農村地域である．ここでの出かせぎが東北に比較し著しく少ないことは，低所得水準という共通経済指標の背後における経済的，社会的，歴史地理的実体の基本的差異の存在を示唆している．

ここでは，出かせぎという社会経済的，人口学行動を中心として，食生活に対する態度の地域ならびに農家・非農家における格差を分析すると共に出かせぎ行動と地域間および出かせぎ行動と職業間における食意識の関係を追求することを目的としている．

食意識に関しては，“食事のこんだてを考える場合にどんな事に重点をおいていますか”の質問の下に，次の4個の回答項目を作成した．重点をおくものとして回答項目は1個に限定した．

① 栄養のこと
② みんなの好むもの
③ あまり手間のかからないもの
④ なるべく安いもの

1. 出かせぎと地域別観察

出かせぎ世帯員をもつ世帯と出かせぎのない世帯に分類して調査対照全体における食意識の分布をみると表1の如くである．

調査対象世帯全体についてみると“栄養のこと”を重点的に考えるものの割合がもっとも多く34%を示していることは注目される．次いで“みんなの好むもの”が32%を占めており，“栄養のこと”を考えているものとあわせると67%を占め，全体の3分の2を占めている．“あまり手間のかからないもの”が20%，“なるべく安いもの”が10%足らずと少なくなっている．以上の事実は，食生活における経済的なコストといった態度は予想外に低く，栄養と家族の嗜好に対する配慮という非経済的態度が圧倒的に多いことは特に注目する必要があろう．もちろん，ここでの設問においては回答が1つの項目に限定されているため，ほぼ同様な配慮のウエイトをもっているものが排除されている．したがって，もし栄養あるいは家族的配慮のいずれかとあまり変らない配慮が経済的側面にも与えられているばあいが多いとするならば，上述のような著しい格差がかなり収縮することも予想される．

まず地域別に考察してみよう．“栄養のこと”を重点的に考慮している世帯数の割合は四国においてもっとも高く44%に達しており，次いで南九州が34%，東北25%となっており，著しい地域格差がみとめられる．“あまり手間のかからないもの”の割合も四国において最低で16%にすぎない．“みんなの好むもの”といった伝統的食慣習を中心にした態度は，地域別に著しい差異はなくそれぞれ30%前後を示している．したがって，“みんなの好むもの”を中心として“栄養のこと”ならびに経済的コスト（“あまり手間のかからないもの”と“なるべく安いもの”の両者）の水準によって，食意識が近代的，合理的主義的であるか伝統的，保守的であるかを判断することができよう．このような観点からみるならば，四国はもっとも前進した意識と態度を示しているのに対して，東北はもっとも伝統的，保守的パターンを示し，南九州は中間パターンであると判断することができよう．

4) 農家世帯員の出かせぎ者数の年度始めの人口たとえば昭和40年農林省調査による出かせぎ農家の農家総数（年次始め）に対する割合東北9.5%，四国2.6%，南九州2.4%となっている（昭和40年農家就業動向調査報告書農林省統計調査部，P.270の経営規模別出かせぎ農家数とP.192の農家の異動により計算．本調査の地域別割合とほぼ対応している．

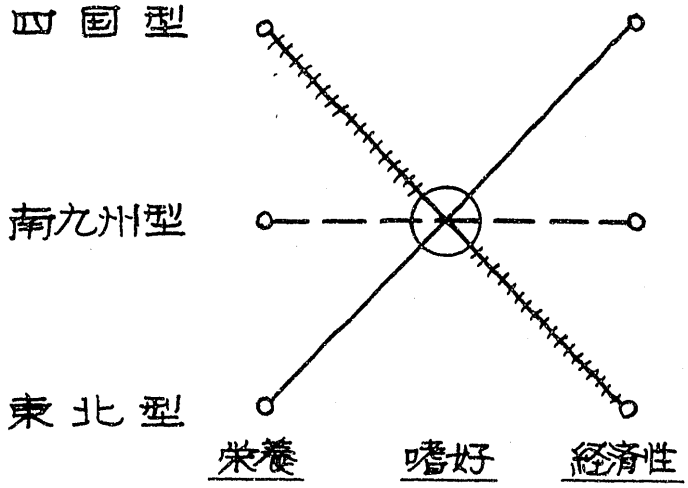
表 1　出かせぎの有無別世帯ならびに地域別食意識の分布

食意識項目	1. 栄養のこと	2. みんなの好むもの	3. あまり手間のかからないもの	4. なるべく安いもの	不詳	計
(出かせぎ世帯)		実		数		
東北	40	89	55	46	5	235
四国	52	39	35	9	10	145
南九州	20	53	29	17	5	124
小計	112	178	119	72	20	504
		分		布		
東北	17.0	36.6	23.4	19.6	2.1	100.0
四国	35.9	26.9	24.1	6.2	6.9	100.0
南九州	16.1	42.7	23.4	13.7	4.0	100.0
小計	22.2	35.3	23.6	14.3	4.0	100.0
(非出かせぎ世帯)		実		数		
東北	458	560	433	222	109	1,782
四国	886	600	308	184	19	1,997
南九州	706	705	460	113	43	2,027
小計	2,050	1,865	1,201	519	171	5,806
		分		布		
東北	25.7	31.4	24.3	12.5	6.1	100.0
四国	44.4	30.0	15.4	9.2	1.0	100.0
南九州	34.8	34.8	22.7	5.6	2.1	100.0
小計	35.3	32.1	20.7	8,9	2.9	100.0
総数)		実		数		
東北	498	649	488	259	114	2,017
四国	938	639	343	193	29	2,142
南九州	726	758	489	130	48	2,151
総計	2,162	2,046	1,320	582	191	6,310
		分		布		
東北	24.7	32.2	24.2	12.8	5.7	100.0
四国	43.8	29.8	16.0	9.0	1.4	100.0
南九州	33.8	33.2	22.7	6.4	2.2	100.0
総計	34.3	32.4	20.9	9.2	3.0	100.0

次に調査対象世帯を出かせぎ世帯と非出かせぎ世帯とに分類してその食意識の分布をみるとかなり著しい差異がみられる．出かせぎのない世帯では“栄養のこと”を重点的に考えているものは35%と高いのに対して，出かせぎ世帯では“みんなの好むもの”がもっとも多く35%を示している．また，出かせぎ世帯では，“あまり手間のかからないもの”が24%．“栄養のこと”が22%と低下している．“あまり手間のかからないもの”と“なるべく安いもの”は非出かせぎ世帯よりもかなり高い割合を示している．出かせぎ世帯では，経済的コストや食に対する労力の節約を考慮した経済的要因が40%に近い高い割合であるのに対して非出かせぎ世帯におけるこの割合は30%に達しない．

食意識を上述の如く3個の指標によって区分し，地域別に，出かせぎ，非出かせぎ世帯およびそれぞれの地域別に分布を観察してみると図1の如くなる．“みんなの好むもの”といったいわば中立的な家族的配慮を基軸として模式的に3個のパターンがみとめられる．いまかりに“栄養のこと”を“栄養”，“みんなの好むもの”を“嗜好”，“あまり手間のかからないもの”および“なるべくやすい

もの”を一括して“経済性”と略称すると3個のパターンは次の如くなる[5].

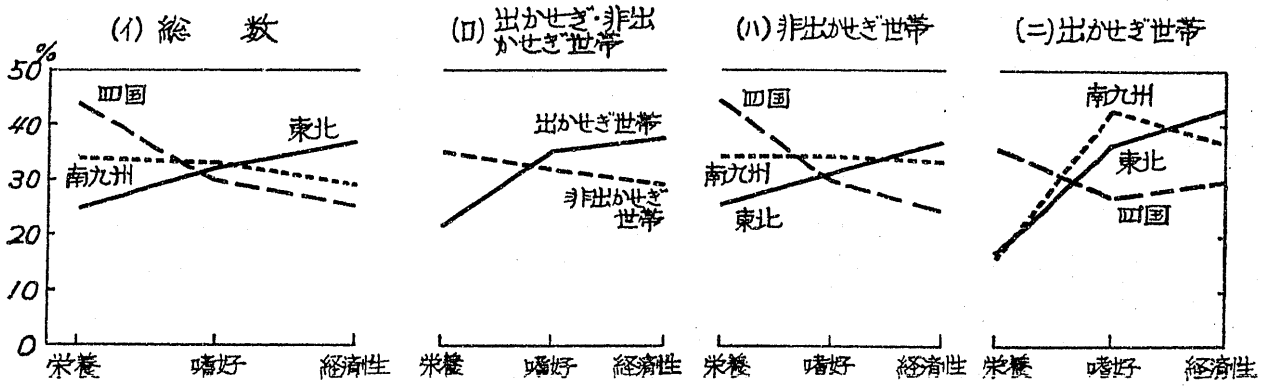


第1のパターン……栄養的意識がもっとも高く，経済性のもっとも低いもの（四国型）

第2のパターン……栄養的意識がもっとも低く，経済的意識の高いもので，第1パターンとは全く相反するもの（東北型）

第3のパターン……栄養的意識も経済的意識もほぼ同様な水準にあり，水平的なパターンを示すもの（南九州型）

図1　総数および出かせぎ・非出かせぎ世帯の地域別食意識のパターン



出かせぎ世帯および非出かせぎ世帯別にみると，前者は東北型に，後者は四国型に近いパターンを示しており，出かせぎ世帯では栄養的意識は著しく低く，経済的意識が強く作用していることを示している（図1の(ロ)参照），非出かせぎ世帯を地域別にみるとその意識分布のパターンは総数についてみられたものと全く同じである（図1の(イ)参照）．しかし，出かせぎ世帯では四国はいぜんとして第1のパターンを示しているが，東北および南九州がほぼ同様なパターンを示し第2および第3のパターンに分離されがたいといった変化がみられる．わずかに東北において“経済性”意識が南九州よりも高く，“嗜好”が南九州よりも低いという差がみられるにすぎない（図1の(ニ)参照）．このように同じく出かせぎの世帯といっても四国における栄養的意識の高水準と東北・南九州の低水準は，出かせぎの実体的な差異もさることながら地域の経済的，社会的条件の差異を反映しているものと思われる．

5）このパターンは人口の年齢構造変動における Sundbärg の法則に類似していることが注目される．
舘　稔，形式人口学，昭35，p.494参照．

2.　農家・非農家の出かせぎと地域別観察

本調査では農家以外に非農家も含まれている．対象非農家数は1,710世帯で全体の27%を占めている．食意識に関しても農家と非農家の間に格差のあることは当然予想されるところである．

農家・非農家別に食意識の分布をみると表2および3の如くである．食意識を3個の指標区分によってそのパターンを示すと図2の如くである．農家の食意識の分布パターンは既述の基本的パターンと全く一致しており，東北の伝統的保守性，四国の近代的合理性，南九州の中間型がきわめてあきらかである（図2の(イ)参照）．

しかし，非農家においては基本的パターンが著しく崩れていることが注目される（図2の(ロ)参照）．いいかえると東北が南九州および四国のパターンに著しく接近しているということである．東北における栄養的関心指標は"嗜好"のそれよりも高く，また四国・南九州との水準の開きはそれぞれ10.4，5.4ポイントにすぎない．農家におけるこの"栄養"指標における東北と四国，南九州との開きはそれ

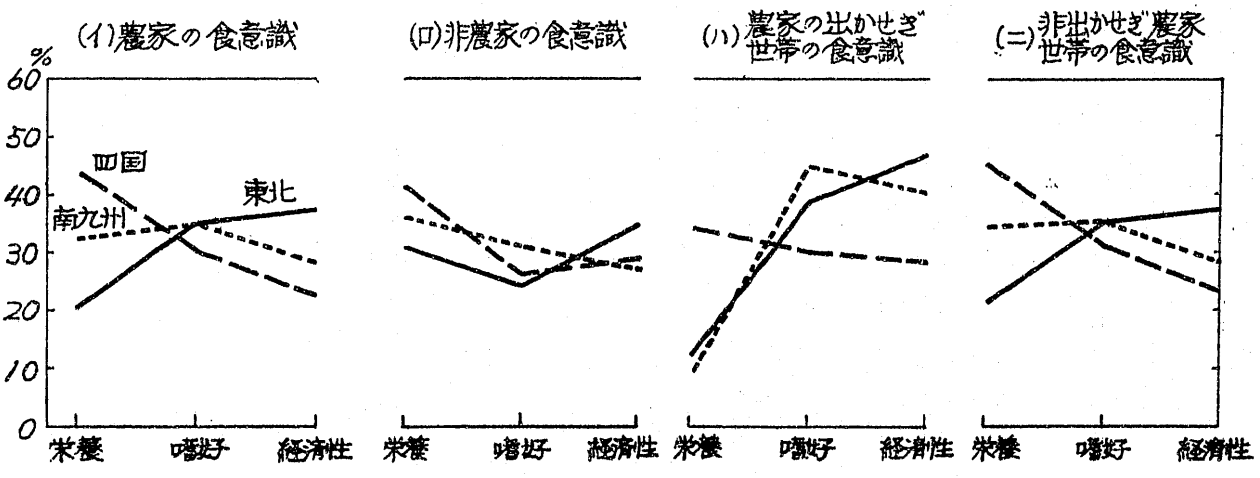
表 2　農家の出かせぎの有無別世帯の食意識分布

食意識項目	1. 栄養のこと	2. みんなの好むもの	3. あまり手間のかからないもの	4. なるべく安いもの	不詳	計
（出かせぎ世帯）		実		数		
東北	20	58	37	32	—	147
四国	40	35	28	5	7	115
南九州	10	45	28	12	4	99
小計	70	138	93	49	11	361
		分		布		
東北	13.6	39.5	25.2	21.8	—	100.0
四国	34.8	30.4	24.3	4.3	6.1	100.0
南九州	10.1	45.5	28.3	12.1	4.0	100.0
小計	19.4	38.2	25.8	13.6	3.0	100.0
（非出かせぎ世帯）		実		数		
東北	269	429	316	138	58	1,210
四国	619	424	219	92	11	1,365
南九州	572	590	390	83	29	1,664
小計	1,460	1,443	925	313	98	4,239
		分		布		
東北	22.2	35.5	26.1	11.4	4.8	100.0
四国	45.3	31.1	16.0	6.7	0.8	100.0
南九州	34.4	35.5	23.4	5.0	1.7	100.0
小計	34.4	34.0	21.8	7.4	2.3	100.0
（総数）		実		数		
東北	289	487	353	170	58	1,357
四国	659	459	247	97	18	1,480
南九州	582	635	418	95	33	1,763
総計	1,530	1,581	1,018	362	109	4,600
		分		布		
東北	21.3	35.9	26.0	12.5	4.3	100.0
四国	44.5	31.0	16.7	6.6	1.2	100.0
南九州	33.0	36.0	23.7	5.4	1.9	100.0
総計	33.3	34.4	22.1	7.9	2.4	100.0

表 3　非農家の出かせぎの有無別世帯の食意識の分布

食意識項目	1. 栄養のこと	2. みんなの好むもの	3. あまり手間のかからないもの	4. なるべく安いもの	不詳	計
（出かせぎ世帯）		実		数		
東北	20	31	18	14	5	88
四国	12	4	7	4	3	30
南九州	10	8	1	5	1	25
小計	42	43	26	23	9	143
		分		布		
東北	22.7	35.2	20.5	15.9	5.7	100.0
四国	40.0	13.0	23.3	13.0	10.0	100.0
南九州	40.0	32.0	4.0	20.0	4.0	100.0
小計	29.4	30.1	18.2	16.1	6.3	100,0
（非出かせぎ世帯）		実		数		
東北	189	131	117	84	51	572
四国	267	176	89	92	8	632
南九州	134	115	70	30	14	363
小計	590	422	276	206	73	1,567
		分		布		
東北	33.0	22.9	20.5	14.7	8.9	100.0
四国	42.2	27.8	14.1	14.6	1.3	100.0
南九州	36.9	31.7	19.3	8.3	3.9	100.0
小計	37.7	26.9	17.6	13.1	4.7	100.0
（総数）		実		数		
東北	209	162	135	98	56	660
四国	279	180	96	96	11	662
南九州	144	123	71	35	15	388
総計	632	465	302	229	82	1,710
		分		布		
東北	31.7	24.5	20.5	14.8	8.5	100.0
四国	42.1	27.2	14.5	14.5	1.7	100.0
南九州	37.1	31.7	18.3	9.0	3.9	100.0
総計	37.0	27.2	17.7	13.4	4.8	100.0

図 2　農家・非農家別ならびに農家の出かせぎ有無別世帯の食意識の分布



ぞれ23.2，11.7ポイントと著しく大きい．

以上のことは，非農家という職業的社会階層が食意識に及ぼす影響は著しく，地域格差は少ないことを示唆している．同時に，農家の食意識における地域格差が極めて大きいことは，自然的条件を母胎とする歴史的，社会的，経済的条件の地域格差の影響の強さをあらわしているものと考えられる．

食意識の典型的な地域パターンを示している農家をさらに出かせぎと非出かせぎの両世帯に分類してその分布をみると，非出かせぎ世帯においては，基本的パターンがより強く表現されるにすぎないが，出かせぎ世帯ではこれらのパターンはかなり著しく変形することがみとめられる（図2の(ハ)(ニ)参照）．パターンが著しく変化しないのは四国のみである．もっとも四国の場合においても“栄養”的関心指標は，非出かせぎ農家の45%に対して出かせぎ農家では35%と著しく低下している．“栄養”，“嗜好”，“経済性”の分布における右下り傾斜の著しい直線パターンからほぼ水平線に転化している．

しかし，東北，南九州における変化は特に著しく，“栄養”に重点をおくものはそれぞれわずかに13.6%，10.1%にすぎず，“経済性”に重点をおくものはそれぞれ47%，40%と著しく高くなっている．

地域性の影響も著しいと同時に，同じ地域の同じ農業でありながら，出かせぎ行動の食意識に反映する影響も極めて大きいことに留意する必要があろう．

3. 年齢，出かせぎ有無別世帯とは地域別観察

食意識が世帯主・妻の年齢によって影響をうけることは充分に予想できる．世帯主とその妻の年齢の両者を考慮することが望ましいが，ここでは統計処理上世帯主の年齢のみによることとした．

全調査対象世帯における世帯主の年齢階級別に食意識の分布をみると表4の如くである．

世帯主が15～24歳である世帯数は少なくまた不詳も多いため，上述の食意識分布の解釈はこんなんである．ただ，25歳以上において不詳であるものの割合が極めて少なく，若い年齢層においてこのように多いことは，農村における若い世帯主世帯では明確な食意識が確立されていないことを示唆しているようにも思われる．

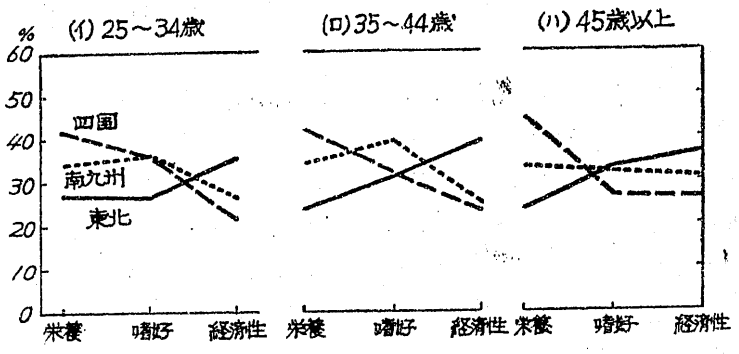
表4　世帯主年齢階級別食意識の分布（全調査対象世帯）

食意識項目	1. 栄養のこと	2. みんなの好むもの	3. あまり手間のかからないもの	4. なるべく安いもの	不詳	計
			実数			
15 ～ 24	17	16	3	3	23	62
25 ～ 34	321	306	169	83	35	914
35 ～ 44	573	583	330	152	38	1,676
45歳以上	1,251	1,141	815	351	94	3,652
不詳	1	—	3	—	—	4
計	2,163	2,046	1,320	589	190	6,308
			分布			
15 ～ 24	27.4	25.8	4.8	4.8	27.2	100.0
25 ～ 34	35.0	33.5	18.5	9.2	3.8	100.0
35 ～ 44	34.2	34.8	19.7	9.1	2.2	100.0
45歳以上	34.8	31.2	22.3	9.6	2.1	100.0
不詳	16.7	—	50.0	16.7	16.7	100.0
計	34.3	32.4	20.9	9.4	3.0	100.0

世帯主年齢25歳以上についてみると著しい格差はみられない．ただ，わずかに25～34歳において最高率の栄養意識がみられること，高年齢に進むに従って“手間のかからないもの”に重点をおく世帯が増大していることがみとめられるにすぎない．しかし，25歳以上いずれの年齢階級においても“栄養”と“嗜好”に重点をおくものが65％ないし70％近くを占めていることと，45歳以上の高年齢においては“嗜好”よりも“栄養”に重点をおく世帯の方が多いことは注目に値いする．

地域別に世帯主年齢と食意識の分布との関係を観察してみよう（15～24歳階級は世帯数が少ないため除外）．図３は前項におけると同様に食意識を３項目にくくって示したものである．３個の地域に関する基本的パターンは年齢階級別にみても変らない．東北と四国の対照的な関係はいずれの年齢階級においてもみとめられるが，特に35～44歳階級において典型的であって，“嗜好”を中心として直線的に交錯している．特に東北の35～44歳において“栄養”が最低水準にあり，経済性が最高水準を示している点が注目される．

図３　世帯主の年齢階級別，地域別食意識の分布



Ⅲ　病休者世帯と食意識

1.　病休者世帯と地域

食に対する意識は疾病と必ずしも密接な関係があるとはいいがたいが，世帯に病休者があるばあい食に対する関心が一時的にせよ喚起させられる契機となることは疑いがない．そこで病休者の世帯か否かによって前節と同様の食意識調査項目の集計を行ってみた．

病休者世帯は685あり，調査対象全体の約11％を占めている．地域別にみると東北9.4％．四国14.3％，南九州8.7％となっており，四国が特に高率となっている．自計主義による調査であるため病休者率に問題はあるが，東北，南九州がそれぞれ９％前後でほぼ等しい水準を示しているのに対して四国が特に高いことは，前項であきらかにされたような“栄養”的関心度のもっとも高いという事実と間接的に関連すると思われる保健認識度の影響を反映しているとも推測される．これは別個に追求されなければならない問題である．

病休者世帯と病休者のない世帯別に各地域の食意識分布をみると表５と図４の如くである．図４では前節同様食意識項目の３と４をまとめてある．

病休者世帯における食意識分布において注目すべき点は東北である．“栄養”に重点をおくものの割合がわずか17％と著しく低く，他方において“経済性”に重点をおくものの割合が50％を超える高水準を示すというアンバランスがみられることである．

しかるに病休者のいない世帯では“嗜好”を中心に比較的バランスがとれた分布を示していることはどのように理解すべきか困難な問題である．病休者世帯では全般に低所得者が多くそのために病休

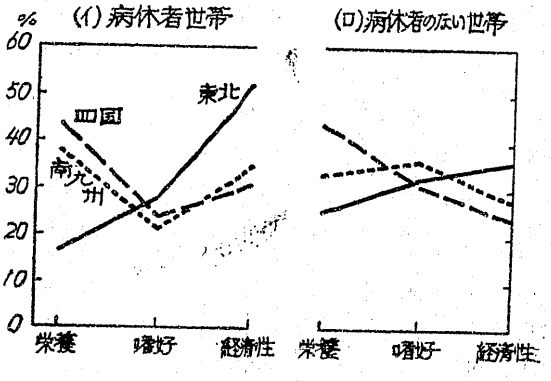
表 5　病休者有無別世帯の地域別食意識分布

食意識項目	1. 栄養のこと	2. みんなの好むもの	3. あまり手間のかからないもの	4. なるべく安いもの	不詳	計
（病休者世帯）		実		数		
東北	32	53	50	49	6	190
四国	135	73	56	40	3	307
南九州	71	40	48	19	10	188
小計	238	166	154	108	19	685
		分		布		
東北	16.8	27.9	26.3	25.8	3.2	100.0
四国	44.0	23.8	18.2	13.0	1.0	100.0
南九州	37.8	21.3	25.5	10.1	5.3	100.0
小計	34.7	24.2	22.5	15.8	2.8	100.0
（非病休者世帯）		実		数		
東北	466	596	438	219	108	1,827
四国	803	566	287	153	26	1,835
南九州	655	718	441	111	38	1,963
小計	1,924	1,880	1,166	483	172	5,625
		分		布		
東北	25.5	32.6	24.0	12.0	5.9	100.0
四国	43.8	30.8	15.6	8.3	1.4	100.0
南九州	33.4	36.6	22.5	5.7	1.9	100.0
小計	34.2	33.4	20.7	8.6	3.1	100.0
（総数）		実		数		
東北	498	649	488	268	114	2,017
四国	938	639	343	193	29	2,142
南九州	726	758	489	130	48	2,151
総計	2,162	2,046	1,320	591	191	6,310
		分		布		
東北	24.7	32.2	24.2	13.3	5.7	100.0
四国	43.8	29.8	16.0	9.0	1.4	100.0
南九州	33.8	35.2	22.7	6.0	2.2	100.0
総計	34.3	32.4	20.9	9.4	3.0	100.0

者があっても“経済性”に重点をおかざるをえないのであろうか．そしてまた，病休者のない世帯では反対に所得水準が比較的よいために“栄養”と“嗜好”が相対的に高くなっているのではないかとも考えられる．

四国，南九州の病休者世帯では“栄養”に重点をおく者の割合が高く，“嗜好”に重点をおくものの割合がもっとも低くなっている．病休者のない世帯に比較して，病休者のあるために“栄養”と“経済性”が特徴としてあらわれているように思われる．このように，四国と南九州では病休という事実に対する考慮が食意識の分布にあらわれて

図 4　病休者の有無別世帯の地域別食意識分布



いるとしたばあい，東北の“経済性”の高水準は貧困であるがための止むにやまれぬ食意識の表現形態として理解されねばならない．それが事実であるとすれば重大なことである．

2. 農家における病休者

病休者の有無別に農家を分類し，その食意識分布をみると表6，図5の如くである．図5では食意識に関する項目を前項同様“栄養”，“嗜好”，“経済性”の3個にまとめてある．

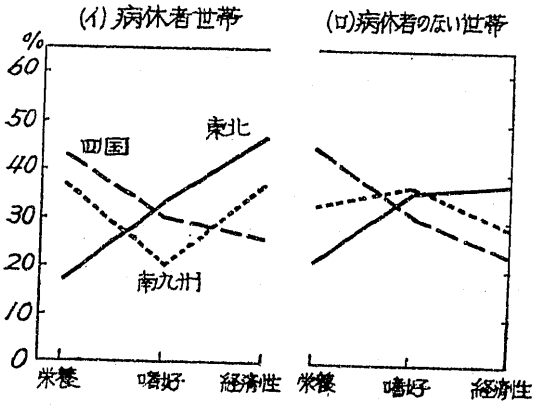
前項で考察した如く，東北の農家では病休者世帯において“栄養”に対する意識度が著しく低く，“経済性”が逆に著しく高い．四国では病休者の有無にかかわらず栄養的関心がもっとも高い．

南九州の病休者世帯では“栄養”と“経済性”が著しく高く，“嗜好”に対する意識が著しく低く病休者のない世帯では“嗜好”に重点をおく者の割合がもっとも高くなっているのと対照的である．病休者世帯と病休者のない世帯とでパターンを著しく異にしているのは南九州のみであり，この点注目すべき点である．

表 6　病休者の有無別農家世帯の地域別食意識分布

食意識項目	1. 栄養のこと	2. みんなの好むもの	3. あまり手間のかからないもの	4. なるべく安いもの	不詳	計
（病休者世帯）		実		数		
東北	19	38	27	26	3	113
四国	77	54	31	15	2	179
南九州	55	30	40	16	8	149
小計	151	122	98	57	13	440
		分		布		
東北	16.8	33.6	23.9	23.0	2.7	100.0
四国	43.0	30.2	17.3	8.4	1.1	100.0
南九州	36.9	20.1	26.8	10.7	5.4	100.0
小計	34.3	27.7	22.3	13.0	3.0	100.0
（非病休者世帯）		実		数		
東北	270	449	326	144	55	1,244
四国	582	405	216	82	16	1,301
南九州	527	605	378	79	25	1,614
小計	1,379	1,459	920	305	96	4,159
		分		布		
東北	21.7	36.1	26.2	11.6	4.4	100.0
四国	44.7	31.1	16.6	6.3	1.2	100.0
南九州	32.7	37.5	23.4	4.9	1.5	100.0
小計	33.2	35.1	22.1	7.3	2.3	100.0
（総数）		実		数		
東北	289	487	353	170	58	1,357
四国	659	459	247	97	18	1,480
南九州	582	635	418	95	33	1,763
総計	1,530	1,581	1,018	362	109	4,600
		分		布		
東北	21.3	35.9	26.0	12.5	4.3	100.0
四国	44.5	31.0	16.7	6.6	1.2	100.0
南九州	33.0	36.0	23.7	5.4	1.9	100.0
総計	33.3	34.4	22.1	7.9	2.4	100.0

図 5　農家の病休者有無別世帯の食意識の分布（地域別）



3.　非農家における病休者

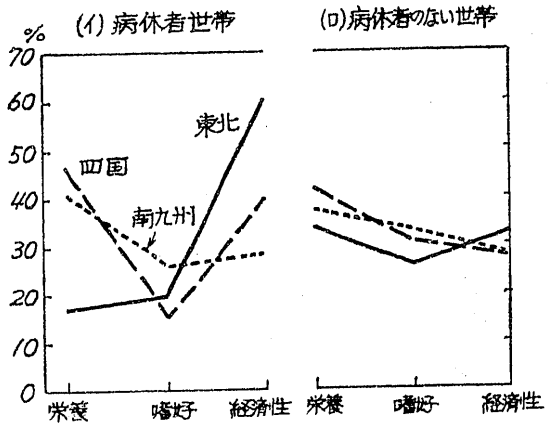
非農家について病休者のある世帯と病休者のない世帯とに分類して地域別に食意識の分布をみると表7と図6の如くである．

非農家世帯における食意識分布の特徴は，病休者世帯と非病休者世帯とでは著しい差異がみられることである．病休者のない世帯では地域格差がほとんどみられない．わずかに東北において“栄養”的意識と“嗜好”的意識が他の地域に比較して若干低いといった点がみられるにすぎない（図6の(ロ)参照）．

表 7　非農家の病休者有無別世帯の地域別食意識の分布

食意識項目	1. 栄養のこと	2. みんなの好むもの	3. あまり手間のかからないもの	4. なるべく安いもの	不詳	計
（病休者世帯）		実		数		
東北	13	15	23	23	3	77
四国	58	19	25	25	1	128
南九州	16	10	8	3	2	39
小計	87	44	56	51	6	244
		分		布		
東北	16.9	19.5	29.9	29.9	3.8	100.0
四国	45.3	14.8	19.5	19.5	0.8	100.0
南九州	41.0	25.6	20.5	7.7	5.1	100.0
小計	35.7	18.0	23.0	20.9	2.5	100.0
（非病休者世帯）		実		数		
東北	196	147	112	75	53	583
四国	221	161	71	71	10	534
南九州	128	113	63	32	13	349
小計	545	421	246	178	76	1,466
		分		布		
東北	33.6	25.2	19.2	12.9	9.1	100.0
四国	41.4	30.1	13.3	13.3	1.9	100.0
南九州	36.7	32.4	18.1	9.2	3.7	100.0
小計	37.2	28.7	16.8	12.1	5.2	100.0
（総数）		実		数		
東北	209	162	135	98	56	660
四国	279	180	96	96	11	662
南九州	144	123	71	35	15	388
総計	632	465	302	229	82	1,710
		分		布		
東北	31.7	24.5	20.5	14.8	8.5	100.0
四国	42.1	27.2	14.5	14.5	1.7	100.0
南九州	37.1	31.7	18.3	9.0	3.9	100.0
総計	37.0	27.2	17.7	13.4	4.8	100.0

図 6　非農家の病休者の有無別世帯の食意識の分布（地域別）



しかし，病休者世帯において東北は“栄養”と“嗜好”が著しく低く，“経済性”が60%といった高水準を示している．四国，南九州では“栄養”が病休者のない世帯よりも高く，“嗜好”が病休者のない世帯よりも低くなっている．

このように，病休者世帯と病休者のない世帯において，農家よりも非農家においてパターンの著しい変化がみられることは，病休者に対する食意識が非農家においてより強度であることを示唆している．

4.　世帯主年齢と病休者の有無別世帯

世帯主の年齢別に病休者世帯と病休者のない世帯に区分し，その食意識分布をみると表8，図7の如くである．図7では食意識項目の3と4はまと

表 8　世帯主年齢別病休者有無別世帯の食意識分布

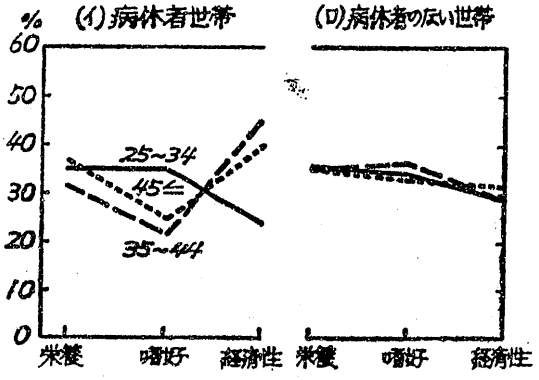
食意識項目	1. 栄養のこと	2. みんなの好むもの	3. あまり手間のかからないもの	4. なるべく安いもの	不詳	計
(病休者世帯)		実		数		
15 ～ 24	1	2	—	—	1	4
25 ～ 34	18	18	6	6	4	52
35 ～ 44	31	21	21	24	4	101
45 歳以上	189	125	127	77	10	528
不詳	—	—	—	—	—	—
計	239	166	154	107	19	685
		分		布		
15 ～ 24	25.0	50.0	—	—	25.0	100.0
25 ～ 34	34.6	34.6	11.5	11.5	7.7	100.0
35 ～ 44	30.7	20.8	20.8	23.8	4.0	100.0
45 歳以上	35.8	23.7	24.0	14.6	1.9	100.0
不詳	—	—	—	—	—	—
計	34.9	24.2	22.5	15.6	2.8	100.0
(非病休者世帯)		実		数		
15 ～ 24	16	14	3	3	22	58
25 ～ 34	303	288	163	77	31	862
35 ～ 44	542	562	309	128	34	1,575
45 歳以上	1,062	1,016	688	274	84	3,124
不詳	1	—	3	—	—	4
計	1,924	1,880	1,166	482	171	5,623
		分		布		
15 ～ 24	27.6	24.1	5.2	5.2	37.9	100.0
25 ～ 34	35.2	33.4	18.9	8.9	3.6	100.0
35 ～ 44	34.4	35.7	19.6	8.1	2.2	100.0
45 歳以上	34.0	32.5	22.0	8.8	2.7	100.0
不詳	25.0	—	75.0	—	—	100.0
計	34.2	33.4	20.7	8.6	3.0	100.0

め“経済性”として示されている．

病休者のない世帯では世帯主の年齢による食意識パターンは著しく一致する傾向を示している．特に，“栄養”を重点とする世帯の割合は34～35％に集中している．

しかし，病休者世帯では高年齢において“栄養”の高水準と“嗜好”の低水準がみとみられる．25～34歳の比較的若い年齢層の特徴は，“栄養”と“嗜好”が35％の同水準にあって，“経済性”が高い年齢層のいずれよりも著しく低いことである．病休に対する配慮が若い年齢層において高いことを示唆しているものと思われる．

図 7　世帯主年齢別，病休者有無別世帯の食意識の分布



ここで分析結果を要約すると次の如くである．

第1点は，同じ未開発地域とよばれる低所得水準地域の農村であっても食生活に対する態度において著しい地域的特徴がみられたということ．

第2点は，社会階層，特に農家，非農家と分けてみると，非農家は地域性よりもむしろ社会階層的特性を強くあらわす傾向があること．

第3点は，同じく農家であっても出稼ぎ世帯と非出稼ぎ世帯により，その態度に変化がみられること．

第4点は，世帯主年齢が食意識におよぼす影響は比較的小さいこと．

第5点は，病休者がいる世帯と病休者のいない世帯との間における食意識において四国，南九州では病休者に対する配慮があらわれいるのに対して東北ではこのような配慮があらわれていないということ．

以上のべた結果の中でもっとも重要と思われ，注目に値いする点は，東北，四国，南九州の地域格差ということである．すなわち食意識の3個の指標にもとづきその地域特有な3個のパターンがみられそれについては前述の通りであるが，更につけ加えると四国型（第1のパターン）はまず望ましいパターンと考えられ，次に東北型（第2のパ，ーン）であるがこれは全く四国型に相反するパターンであり，このような地域がもっとも重要な政策の対象となるのではないかということである．南九州型（第3のパターン）は両パターンの中間にあって，四国型に達する前段階にあるとも考えられる．地理的にも四国と近接しており，四国型水準に発展させることはそれほど困難な問題でもない様に考えられた．

主婦の食生活に対する意識の基本的パターンを出発点として更に問題を展開していくことが出来ると思う．

Differential Attitude in Dietary Life in the Underdeveloped Areas

Sumiko UCHINO

1. Rational attitude in dietary life is not easily accepted particularly by rural wives in remote villages which have been surveyed by us in recent two years, 1966 and 1965, mainly because traditional pattern of diet is much more deeply rooted in rural people than in urban residents.

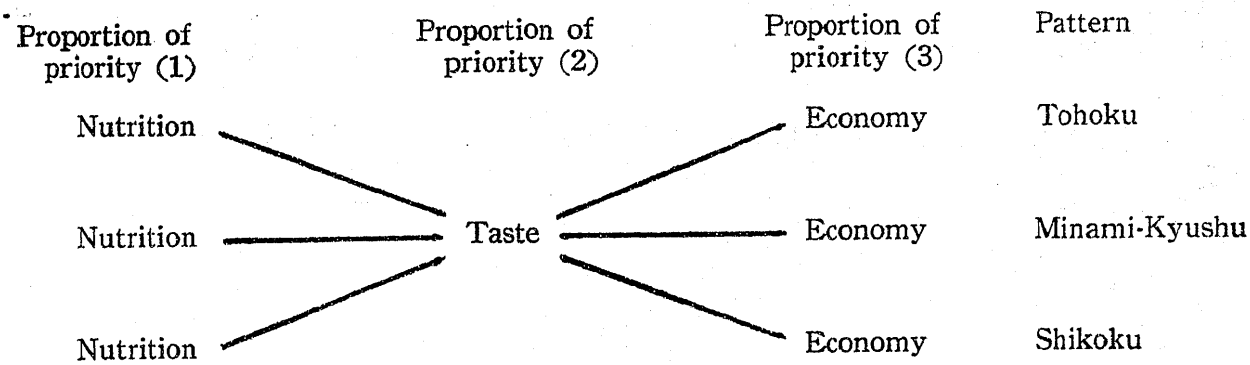
2. However, it is striking that remarkably differential pattern in attitude for diet was found even among surveyed areas which are essentially underdeveloped rural ones. Nearly two thousands of housewives in each designated area in the three regions, Tohoku, Minami-Kyushu and Shikoku, have been surveyed. Three questions were asked to which wives were requested to check one from them, considered to be most appropriate by them. They are as follows:

In preparing diet,

Nutritious consideration is given priority (1),

Taste of family members is given priority (2),

Cheap and easy cooking (economic consideration) is given priority (3).

3. Surveyed schedules have been tabulated by farmers and norfarmers, by farmers with and without sick members, and by age of households and so on.

4. Most interesting finding is that the proportion of housewives who answered "yes" to question (1) and question (3) tends to move up and down reversely centering around the proportion of question (2). Tohoku is lowest in the proportion of priority (1) and highest in the proportion of priority (3). Shikoku shows reverse proportions, and Mimami-Kyushu is situated intermediately. It is shown schematically as follows.